

## 刊行にあたって

若い先生方よ、もっと楽しく義歯に取り組もう！

高齢者の比率がますます増加の傾向をたどる日本社会では、総義歯に関する需要は増えこそすれ、減ることはないであろうと予測されます。また無菌顎症例に対してインプラントで対応している症例の比率は、日本では依然として少ないものと推測されます。つまり総義歯はまだ必要とされている臨床技術なのです。

しかし一方では、若い歯科医師を中心として総義歯にあまり積極的でない、いわゆる「総義歯離れ」があることが、義歯を手がけているベテランの先生方から危惧されています。

このような患者側と歯科医師側の「乖離」ともいえる状況に対して筆者も憂慮をしている一人です。

なんとか総義歯に真摯に、かつ親しみをもって取り組んでくれるドクターを増やしたい。本書はそんな思いを伝えたいとの気持ちを込めて執筆いたしました。

総義歯は一見とっつきにくい分野ですが、一度取り組むと、その面白みに引かれる臨床分野です(もちろん他の分野もそうですが)。そして先生方の体力や年齢に比較的關係なく、むしろ経験を踏むごとに円熟味が増してくる領域ではないでしょうか？ スポーツでいえば、老若男女が取り組めるという点でゴルフに似ているかもしれません。

そして機能回復や審美性の回復が即座にしかも顕著に表れ、患者にダイレクトに感謝されるという意味でやりがいを大きく感じられる分野です。

本書は次のようなスタンスを貫いたつもりです。

- 学術的な裏付けを配慮しながらも、総義歯の経験の浅いドクターにもわかりやすい記述を心がけた
- 術者の技量、症例としての難易度、患者の要求度などによってアプローチの仕方に融通をもたせることを配慮した
- 日本の医療制度の下では、とくに補綴に関しては「保険か、自費か」という問題が必ず付きまとう。これに対する現場での対応策について一定の示唆を行った
- 臨床技量の上達の大きな鍵となる「手ごたえ」「勘所」といった領域について「手指感覚の会得」といった仮説を提示し、これについてできるだけ詳述を試みた

本書を読んで「よし、一度取り組んでみるか」そんな気になっていただければ、望外の幸せであります。

また本書の記述は筆者一人の力ではなし得ませんでした。総義歯補綴の奥深さを教えてくださった阿部二郎先生、小生を総義歯の世界に送り出してくださった塩田博文先生、一緒に研鑽し多大な助力をいただいたJDAのメンバー、影になり助力してくれた医院のスタッフ、そして虚飾ない、だからこそ有益な評価をいつもくれた家内に感謝いたします。